The Japan Lung Cancer Society

シンポジウムⅣ－6

肺癌における拡大手術の意義

長崎大学医学部第一外科
○綾部公懿，川原克信，母里正敏，富田正雄

肺癌の診断●治療は進歩してきたとは云え依然として進行癌が多く，全肺癌例の切除率は50％に満たないのが現状である。そこで外科治療成績向上を目的として肺癌の拡大手術のおこなわれた症例を検討し，拡大手術の意義と問題点につき検討した。

昭和59年12月までに切除された肺癌は427 例で，そのうち隣接臓器例は65例(15.2 ％)である。合併切除された臓器は壁側胸膜17例，胸壁14例が多く次いで肺動脈，心膜，横隔膜の順であり６例には２ないし３臓器の合併切除がおこなわれている。合併切除例の根治度を組織型別にみると扁平上皮癌は21例(72.2%) が治癒●準治癒手術となつたのに比較し腺癌ではわずか２例(8.0%) に治癒手術が可能で，13 例 (52.0%) は非治癒におわつている。合併切除臓器別に予後の面から検討すると胸壁，壁側肋膜合併切除例では短期間に死亡する例もある半面，１年以上生存すると長期生存が期待しえた。隣接臓器合併切除例からみた予後良好例の特徴を述べると扁平上皮癌で限局性の癌浸潤例であり，放射線療法の併用がおこなわれた症例であつた。この他合併切除により２年以上生存したものは肺動脈，心膜合併切除や横隔膜切除例にみられた。複数臓器合併切除例では大半が６カ月以内に死亡しており，合併切除の意義はないと考えられた。

次に遠隔転移を有するM_1 例に対し肺切除を施行した32例について検討した。組織型では腺癌が18例 (56.3％) を占め，扁平上皮癌は９例であり，遠隔転移部位は鎖骨上リンパ節が10例と最も多くその他骨，肝，脳などである。このうち18 例では遠隔転移臓器の合併切除もおこなわれた。進行例であるので予後は不良である例が多かつたが，10例が１年以上生存しうち４例が２年以上生存した。M_1 例に対する肺切除は一般に否定的であるが，隣接臓器に浸潤なく，縦隔リンパ節転移のない，すなわちM_1がなければ治癒切除となる例において１年以上の生存が期待される結果をえた。

第３に胸骨正中切開により縦隔リンパ節の拡大郭清を施行した６例について検討した。症例数が少ないので結論は下しえないが，対側リンパ節転移例であつた２例は６カ月以内に死亡し，一方No １に転移陽性であつた腺癌例が1.6 年の現在再発なく生存中であることは同側の縦隔リンパ節転移陽性例に対する拡大手術としての意義があると考えられた。

シンポジウムⅤ－1

肺野孤立性陰影の画像診断
－肺野末梢型小型肺癌の確定診断と鑑別診断－

国立療養所近畿中央病院内科，外科*
○荒井六郎，林　清二，児玉長久，鶴田正司，
河原正明，清田俊子，古瀬清行，沢村献児*

〔目的〕近年の肺癌の急増のため，胸部Ｘ線写真上孤立性陰影を呈する症例の鑑別診断は，ますます重要な課題となってきた。Ｘ線像の解析，気管支鏡下生検やＣＴ検査等の発展により，肺野孤立性陰影を呈する疾患のうち肺癌に関しては，ほぼ診断体系が整ったとさえ言い得る状況と思われるが，今日においても試験開胸の施行される例もある。即ち，現在求められるものは，①径２㎝以下の小型肺癌の確定診断，②肺野孤立性陰影を呈する症例のうち，非癌疾患の確定診断ないしは信頼性の高い臨床診断，の２点であると考えられる。この立場から，肺野孤立性陰影を呈する症例を，肺癌例と非癌例とに別け，対比検討した。

〔対象と方法〕国立療養所近畿中央病院の昭和57年から59年までの３年間の外来初診患者中，呼吸器疾患患者は5,504例で，うち肺結核2,222例，肺癌916例，慢性閉塞性肺疾患648例，じん肺332例，肺炎374例，他の呼吸器疾患1,012例であった。これらのうち肺野孤立性陰影を呈した症例は，肺癌916例中186例（20％），転移性肺腫瘍99例中12例（12％），肺良性腫瘍３例中３例（100％），肺結核2,222例中133例（６％），肺炎374例中55例（15％），その他６例，不明21例であった。これら計416例について，胸部単純・断層Ｘ線像の解析，過去のＸ線写真との対比，喀痰検査，ＣＴ検査（ＣＴ値測定），気管支鏡下擦過および肺生検，経皮的穿刺肺生検を順を追って施行し，得られた成績を検討した。

〔結果〕肺癌186例中184例（99％）が，喀痰細胞診，気管支鏡下擦過細胞診，経皮肺針生検によって癌細胞が検出された。確定診断されなかった２例中１例は，Ｘ線像にて肺癌と診断され手術された症例で，残る１例が1.9×1.5㎝大の時に，精査にても癌細胞が検出されなかった症例である。径２㎝以下の肺癌は18例（10％）で，17例に癌細胞が証明された。Ｘ線像では，石灰化，衛星病巣，空洞を伴うものはなく，ＣＴ値も全て130以下を示した。胸膜嵌入は14例（78％）に認められた。２㎝以上の肺癌168例中24例（14％）に過去のＸ線写真上２㎝以下の腫瘤影が確認され，確定診断の遅延が痛感された。肺癌との鑑別診断上最も重要である肺結核133例では，径２㎝以下の症例は46例（35％）であった。133例中48例（36％）に，精査にて結核菌が証明された。ＴＢＬＢ組織診は２例（２％）で，計50例38％が確定診断された。Ｘ線像では，石灰化22例（17％），衛星病巣64例（48％），空洞52例（39％），胸膜嵌入59例（44％）であった。試験開胸例７例中肺癌症例はなく，５例が肺結核，２例が良性腫瘍であった。

NII-Electronic Library Service